

説得の主題

— *Measure for Measure* その倫理的、
論理的展開における聖と俗 —

高 橋 昭 三

- I はじめに
—— 説得場面 *Seduction Scene* における
相対的、共通的主题
- II *Measure for Measure* の説得場面における説得の主題
- III 聖と俗——倫理的、論理的展開
 - A 第二幕第二場
 - B 第二幕第四場
- IV おわりに

I はじめに

— 説得の場面 *Seduction Scene* における相対的、共通的主题

説得 (*temptation, persuasion, seduction*) は、劇における一つの問題点を、また観衆に対してはある種の暗示を与えることが出来る。それは説得者と被説得者間の相互作用、相関的な変質変形は、劇筋における重要な意義を与えるからである。両者は相対的質とその立場を明確にしながらも、論理的説得と、それに伴う現象的諸矛盾によって起る問題点 — さらに、両者の深層に内在する諸問題点が露呈されてくる。特にキリスト教倫理観に基づく展開には、説得の主題が、深く内在する人間の諸様相を表層的な面ばかりでなく深層的なものとして考察することによって、作者の人間観追求の一端を知ることが出来る。

Nor more can you distinguish of a man
Than of his outward show, which, God he knows,
Seldom or never jumpeth with the heart.

(*Richard III*, III, i, 9-10)

後のリチャード三世、Gloucester 公が自分の姿と照し合せて語る言葉は、決

して彼一人の自己弁護ではなく、全ての人間に共通する問題であろう。異常な雰囲気の中で *Lady Anne* に求愛をする *Richard The Third* の一幕二場 1~224行の場面。Lady Anne が「女心のなさけなさ」と自責の念にかられた告白、

Lo, ere I can repeat this curse again,
 Within so small a time, my woman's heart
 Grossly grew captive to his honey words
 And proved the subject of mine own soul's curse,
 Which hitherto hath held mine eyes from rest; (IV, i, 79-82)

を導き出させたあの残忍で冷酷な seduction scene では Lady Anne は何を未来に託くそうとしたのであろうか。夫そして父王を殺害した Gloucester 公が「貴女ゆえに、貴女の美しさ故に」と、關に浮ぶ幻影が、花を咲き競わす陽光であるかの様に甘く誘う言葉の裏こそ恐ろしいものはない。

Anne. Thou wast the cause of that accured effect.
Gloucester. Your beauty was the cause of that effect;
 Your beauty, that did haunt me in my sleep
 To undertake the death of all the world,
 So I might live one hour in your sweet bosom. (I, ii, 120-4)

人の意表をつく心理的な接近。女性の frailty を巧妙に利用した甘言は、Anne の美しさを特に目と口に合せて籠絡していく。

自由と正義を求め、欲望を追求せず、支配の実現を拒否する Marcus Brutus を、自陣営に組み入れるための *Julius Caesar* 一幕二場 25~323行の場面。'Who so firm that cannot be seduced?' (*Julius Caesar*, I, ii, 313) と自負する狡猾な Cassius は、現実的把握を事象の表裏に基づかせ、鏡と目を引喩する。Cassius は Brutus に向って

Tell me, good Brutus, can you see your face?
Brutus No, Cassius, for the eye sees not itself
 But by reflection, by some other things.
Cassius. 'Tis just,
 And it is very much lamented, Brutus,
 That you have no such mirrors as will turn

説 得 の 主 題

Your hidden worthiness into your eye,
That you might see your shadow. (II, ii, 51-8)

Cassius は Brutus の内的葛藤を真実の目と、良くみえる鏡とによって、自己の見えない行為の顕現化 — passive から active へと説得する。Caesar に対する Cassius の個人的憎悪に基因する反逆行為であることを推測しつつも、Cassius の誘いの言葉

And since you know you cannot see yourself
So well as by reflection, I your glass
Will modestly discover to yourself
That of yourself which you yet know not of. (I, ii, 68-70)

に、自己の不安を写出されること、また自から鏡に写し出されることを心ひそかに決心していく。被説得者の内的相互作用が、外的作用に触発されて同じ或いはそれ以上に影響をうけたと考えられる。自由と正義の為の自己正当化への論理が、Cassius のもつ近代的権力指向型思考と表裏において合致したことにも一つの要因をみる。

Othello 三幕二場90~279行と319行以下同場最終行数までの Iago と Othello の seduction scene では、Iago が一種の鏡となっている。エコーである。

Oth. O, yes; and went between us very oft.
Iago. Indeed!
Oth. Indeed! ay, indeed: discern'st thou aught in that?
Is he not honest?
Iago. Honest, my lord!
Oth. Honest! ay, honest
Iago. My lord, for aught I know.
Oth. What dost thou think?
Iago. Think, my lord!
Oth. Think, my lord!
By heaven, he echoes me,
As if there were some monster in his thought
Too hideous to be shown. (*Othello*, III, iii, 100-8)

激怒した Brabantio が 'She has deceived her father, and may thee'

(I, iii, 290) と、唾棄した言葉を更にエコーした Iago の言葉は、Othello を悲劇の深淵へと追いこむ。Othello では Iago によって悲劇が始まるといえるし、この seduction scene は悲劇構成の大きな一部となっているとさえいえる。論理と想像の葛藤、事実と幻想的現実感の転回、自己正当化と order の乖離、これらが Othello の内的 chaos をつのらせていく。知性の役割は、逆に邪悪な想像の焰を燃え上がらせていく。⁽¹⁾ *Richard The Third, Julius Caesar, Othello* では、実践三段論法の駆使によって被説得者自身の自己懂着的論理の展開へと埋没している。Othello にはこの部分をもっとも明確に表われていると考える。Iago の逆言的方法による seducing によるとはするものの、Othello 自身の自己説得、H. A. Mason のいう 'inner reflection'⁽²⁾ がそれをますます大きく作用している。

Seduction scene における主題として、説得者、被説得者相互の異質性は表層的に人間の脆弱性、人格の二重構造化にもとづく自己偽善性などがみられる。更にこれらの人物に内在する 'two embodiments' の表出と、個人内における矛盾解決の為に起る逃避、認識、没個性、自己正当化等々での葛藤が悲劇性と結びついて観客に強く訴えてくる。またこれらの場面構成に必要な Art に、説得者と被説得者間に誘引する何かへの観客の anticipation と psychological approach (これらには言語用法 rethoric, equivocation の問題も含まれる) が考えられる。現実の中で、虚構を真実として求めさせ passive から active へとかりたてる情念に変化させる共通性もある。然しそこにある共通した —fact— 事実と、logic の優位性とによって、詩的想像性は少なからず欠落するのは当然かもしれない。

II *Measure for Measure* の説得場面における説得の主題

Haste still pays haste, and leisure answers leisure ;

Like doth quit like, and *Measure* still for *Measure*.

(*Measure for Measure*, V, i, 415-6)

Duke Vincentio が、裁きをする中に引喩したこの言葉が、*Measure for*

- (1) 拙著論文「Shakespeare の嫉妬 — Othello と Leontes の認識を中心にして —」北星論集1973年10号を参照にされたい。
- (2) H. A. Mason: *Shakespeare's Tragedies of Love*, (Chatto & Windus, London), 1970, p. 276.

Measure に流れる倫理観として受けとめられている。これはマタイ伝7章1～2節、⁽¹⁾更にルカ伝6章37節、マルコ伝4章24節の judge と measure からの類推による。Second gentleman が ‘Thou shalt not steal?’ (I, ii, 10) と、Lucio の十誡の一条を塗り消したという返り言葉との関連。ハイデルベルク信仰問答⁽²⁾によれば第八誡の答えとして、「神はただ官憲の罰する窃盗、強盗を禁じ給うばかりでなく、神は暴力によってであるにせよ、権利を装うにせよ、(不正な目方、不正なものさし、不正な秤、不正な品物、不正な貨幣、不正な利息) 或いはその他の神に禁ぜられている方法によって隣人のものを自分のものに入れようとする一切の行為、企てをも亦、窃盗と称び給う」とある。不正な秤という表面的な意味以上に人間の枠内にある事柄 matter をも述べている。しかし *Measure for Measure* に登場する人物は英圏国教会の人物として描がかれてはいない。が同時代の宗教を否定あるいはそれに反抗をしていない作者の時代適応性が同時代的感覚のみならず、普遍的、先見の感覚を十分に活かし、なおかつ人間性の追求がキリスト教倫理観に根ざした形で描写されている。

H. Matthews が ‘one of the great beauties’ は二つの世界の対照にある⁽³⁾と指摘するが、*Measure for Measure* 二幕二場25～187行と四場30～187行の seduction scene にこそ二つの世界が凝集されていると考えられる。二つの相対的世界。人間の二面性 — 意識的、無意識的に表出される self-contradiction. Social order に対する active 性と passive 性。これらが religious morality and ethics 宗教的倫理観を背景にして、また基盤的素材として存在している。更に judicial events として社会性の論理と倫理の問題が一人間存在の背、否定、愛情、罪と罰等 — 究極的な人間性との深いつながりの中で説得者、被説得者間及び観客との間に深淵な問題を提示する。

Morality and mercy in Vienna

Live in thy tongue and heart:

(I, i, 45-6)

- (1) Judge not, that ye be not judged. For with what judgement ye judge, ye shall be judged: and with what measure ye mete, it shall be measured to you again. Matthew, 7: 1-2.
- (2) 「ハイデルベルグ信仰問答」竹森満佐一訳、(新教出版社、東京)、1956.
- (3) Honor Matthews: *Character & Symbol in Shakespeare's Plays*, (Schocken Books, New York), 1962, p. 114.

One of the great beauties of *Measure for Measure* lies in contrast between the world of human society, . . . and the world of the individual in which are possible both sin and its forgiveness.

Duke Vincentio が Angelo に語る言葉は、世俗的善悪 — Virtues⁽⁴⁾ — Vices (crime) — の統括であり、国家的秩序の権威的統括への容認である。これは当時の国王（支配者）の論理でもあり、⁽⁵⁾倫理でもあろう。Angelo 自身が Duke Vincentio の地位を代行すれば、当然この様な論理は法 = Angelo となる。即ち 'He will be living fusion of social responsibility and authentic, spontaneous self-expression⁽⁶⁾' の立場への移行を容易ならしめる。

宗教的善悪 — Virtues-Sins との相克が原罪観に根ざした諸問題と人間の様々な様相の中にうずく諸問題の中で現わされてくる。本質と現象とは、きりはなすことの出来ない客観的現実の二つの側面である。内面的側面（本質）は外面的側面（現象）を通してしか現れない⁽⁷⁾としても、説得者と被説得者の価値判断による振幅を見逃すことは出来ない。キリスト教倫理と関連ある Virtue として loving-kindness, mercy, humility, forgiveness, purity, all equalities praised in Beatitudes⁽⁸⁾を掲げている。人間は自己完全化を謳歌することは不可能といえる。またそれ以上を求めようとするのは思いあがった罪といえる。これは sin 原罪の概念⁽⁹⁾と考えられる。根源的に内在する問題が

(4) Basil Willey: *The English Moralists* (Chatto & Windus, London), 1965, p. 43.

Lily B. Campbell: *Shakespeare's Tragic Heroes* (Barves & Noble INC., New York), 1967, p. 97.

B. Willey によれば 'Virtue is a form of knowledge' であって、ルネッサンス以降の人々の思想に盛られている要素である。また L. B. Campbell は、Virtue の働きを 'in all considerations of the control of passion of reason' にあると指摘する。これには知性以上にもっと深い意味をもたせたものであり、virtue—knowledge の単的な思考だけにおわらせないことを示唆すると考える。

(5) 後藤真、八代崇「権威—エリザベス期の英国教会における模索」(立教大学、キリスト教学14号) 1973, pp. 64-6.

ヘンリー八世の The only Supreme Head in earth of the Church of England という称号を The Supreme Governor に代えたにすぎないといわれているエリザベス女王の「国王至上令」を境とし、「これまでの教会と国家の関係と、宗教改革以後のそれとの違いは、最終的権威が霊的権威から世俗的権威へ移ったことであった。」この事は世俗的善悪と宗教的善悪の判断に対する権威の優劣を考える意味でも興味あるものと考えられる。

(6) Terence Eagleton: *Shakespeare and Society, Critical Studies in Shakespearean Drama* (Schocken Books, New York), 1967, p. 71.

(7) 沢田和夫、「トマス・アクイナス研究」(南窓社、東京) 1963, p. 41.

(8) B. Willey: *The English Moralists, op. cit.*, p. 39.

Beatitudes (至福) とはマタイ伝5章3節〜11節までのイエスの「山上の垂訓」である。

(9) 村田四郎、「パウロ思想概説」(新教出版社、東京) 1955.

説得の主題

Angelo (被説得者のちに説得者) と Isabella (説得者のちに被説得者) の相対的存在として、また対照する世界の中で、それぞれに単一或いは二重構造的に表象されることにある。しかしそれは同心円によって画かれることや近接することも時としてありうることもある。しかもそこに内在するものの相克は、人間が決してそれから脱しきれない様相を深く秘めている。

Ⅲ 聖と俗 — 倫理的、論理的展開

A 第二幕 第二場

I am woeful suitor to your honour,
Please but your honour hear me. (27-8)

兄の助命を乞う妹という弱い立場で、しかも兄を救済したい心情と弁護して助命を求めることへの疑念から、この説得場面 *Seduction Scene* は始まっている。兄弟愛が、聖潔を守ることと、国法(社会法)を守ることとの葛藤からすでに自己矛盾にあることを意味する。

There is a vice that most I do abhor,
And most desire should meet the blow of justice;
For which I would not plead, but that I must —
For which I must not plead, but that I am
At war 'twixt will and will not. (29-30)

従って、Isabella は *crime* と *sin* — 社会的秩序(世俗的)での罪と、霊的秩序(宗教的)での罪の相対性を認識しつつ、罪と罰論という教会における救済論を前面に押しださざるを得ない。いわゆる論理の迂回であり、すれかえであり、また自己矛盾を克服する方法ともいえよう。*Logical judgement* と *ethical judgement* の相克をもたらすのは当然といえる。

兄 Claudio は自己救済のために、妹 Isabella を評して、

she hath prosperous art
When she will play with reason and discourse,
And well she can persuade. (189-91)

と大きな期待をもつ。T. Eagleton は '*Craft (Art) and ignorance are alike in that they both fall short of the synthesis of spontaneity and com-*

plexity'⁽¹⁾と兄が期待する説得(= craft)は妹の法に対する ignorance とともに決して論理的融合へと進展することがないことを指摘するのも当然であろう。Isabella は支配者の論理(法正義)を少なくとも容認しているので、Angelo への訴えは限定されてくる。政教(政治と教会)分離⁽²⁾の問題を提起していた当時の社会にも、ある程度以上にこの思考、判断を受入れる素地はあったと考えるのは何能である。彼女は従って、「この世の権威を二の次にして、まず神の権威を第一に据え、神の声に従うことを心に決め、謙虚さをもって」⁽³⁾との大前提で兄の罪の許しを求めることに躊躇する様に感じられる。Isabella はただ、イエスの言葉(マタイ伝7章1~2節)を個人の判断(審問)の中にのみ当てはめようと努力することに傾倒する。これは Angelo の即ち支配者の判断を放棄することの呼びかけをしているとは決していえないし、⁽⁴⁾また放棄を主張しているわけでもない。Angelo は法の執行者として、論理的に拒否出来るし、又当然の帰結といえる。

眠っていても決して死法でない事、また法の厳しさを説く。

Be you content — fair maid.

It is the law, not I, condemns your brother.

Were he my kinsman, brother, or my son,

It should be thus with him:

(79-83)

現行法の有効性を明確にすることによって、Isabella の主張の無効性を知らしめることになる。Angelo の法の絶体性への確信は⁽⁵⁾、Isabella の説得方法より優れており、またこのことによって自己の行為を安易な方向に進むことを抑制せしめることになる。Isabella にとって兄 Claudio を救済するために、犯罪のためその存在を否定される人間であっても、「マグダラのマリアに石

(1) T. Eagleton: *Shakespeare and Society, op. cit.*, p. 91.

(2) 後藤真, 八代崇「権威」前出, p. 76-7.

(3) H. カメン, 成瀬治訳「寛容の思想の系譜」(平凡社, 東京), p. 330.

アナバプテスト派の主張の根拠は、マタイ伝22章21節 'Render therefore unto Caesar the things which are Caesar's and unto God the things that are God's' にある。

(4) A. P. Rossiter: *Justice on Trial in 'Measure for Measure' in Shakespeare's Later Comedies*, ed. by D. J. Palmer (Penguin Books Ltd., Harmondsworth), 1971, p. 102.

(5) Rolf Soellner: *Shakespeare's Patterns of Self-Knowledge* (Ohio State University Press, Ohio), 1972, p. 219.

をもって責めることは誰れにも出来ないこと」⁽⁶⁾—贖罪論の展開で罪は許せること。また人間の authority (権威) と、またその authority をもつ人間といえども弱い存在であることを真摯に説くしかない。

but man, proud man,
Drest in a little brief authority,
Most ignorant of what he's most assured—
His glassy essence—like an angry ape,
Plays such fantastic tricks before high heaven
As make the angels weep. . . (117-122)

パウロが「律法は罪なのか。断じてそうではない。律法によらなければ、わたしは罪を知らなかったであろう」(ロマ書7章7節以下)と悲痛な葛藤をのべている。この言葉といえども、法正義 (Justice) を示そうとする Angelo にとっては到底容認しうる段階ではない。

Isabella の展開は、神の倫法と人間のもつ倫理⁽⁷⁾とを錯綜させ、社会的秩序を個人的秩序に転換させている。黄金律 (Golden rule to human justice) — 'Therefore all things whatsoever ye would men should do to you, do ye even so to them' (マタイ伝7章12節) と関連する説得 (これは正に人生における実存的問題性を本質的に提起している),

If he had been as you, and you as he,
You would have slipped like him— but he, like you,
Would not have been so stern. (64-6)

神の正義 (人間社会の法正義を超越したものとして) と贖罪を求める説得,

Alas, alas. . .
Why, all the souls that were were forfeit once,
And He that might the vantage best have took

- (6) ヨハネ伝8章1~11節, イエスの言葉 'He that is without sin among you, let him first cast a stone at her' に対して 'being convicted by *their own* conscience, went out one by one, beginning at the eldest, even into the last' とある。
- (7) Virgil K. Whitaker: *Shakespeare's Use of Learning. An Inquiry into the growth of his Mind and Art* (The Huntington Library, San Marino California), 1953, p. 215. V. K. Whitaker は 'in relation to the mercy of God and man' と *Measure for Measure* の主題を説明する。神の mercy は、神の律法—キリスト教倫理であり、人間の mercy は世俗における法の問題—社会秩序の倫理である。そこに現われる人間の内外面的罪の問題が当然派生する。

Found out the remedy: how would you be,
 If He, which is the top of judgement, should
 But judge you, as you are? O, think on that,
 And mercy then will breathe within your lips,
 Like man new made. (72-9)

ここに到って Isabella の説得は、相対比の問題から派生する多くの矛盾を残しつつも、一貫性あるものとなつている。罪と罰の分離 — 慈悲 — 審判または審きの問題 — 懺悔の時 — 見せしめ処罪の不当性 — 個人的感情を含めた慈悲 — 権力行使者への諫言 — 世俗的権力者の傲慢さと、神（全能的権力者）の愛の偉大さ等の論究は、慈悲 mercy に集大成された中では個人的思考と期待感を大きく前進させ、支配者側の論理を超えるものには到らなかつた。帰納的思考によるのでは、世俗法と対決しえないことを認識しているかは別として、ここに到るまでは、演繹方法によつている。存在性 — 生への主張がややもすれば passive な形でしか追求していないと感じられる。兄 Claudio の妹評⁽⁸⁾も当をえていると考えられよう。

E. Schanzer⁽⁹⁾ は、Shakespeare の justice, mercy に対する態度を「中世の mercy 概念に戻っている」と指摘し、更に Isabella は mercy を求めても equity まで求めていないと考える。‘What sort of equity?’ と W. Pater⁽¹⁰⁾ はいう。Isabella の説得の中に人間的行為への訴えも、Angelo の意志 (will) の掌中にあり、そこには何の equity も存在しないし、それは個人感情に依拠しつつあれば求め得ないことにもなる。Will はまた腐敗する要素を秘めている。⁽¹¹⁾ 当時のキリスト教倫理観は、ルネッサンス思想と相接つて、Othello にあらわれる passion, reason, justice をみる時によりよく理解される事柄である。Thomas Lupton の *Too Good to be True* (1581) には、*Measure for Measure* の先行的要素 (unjust, judge) がすでにみられる。⁽¹²⁾ また William

(8) Sister Miriam Joseph, C.S.C.: *Shakespeare's Use of the Arts of Language* (Columbia University Press, New York), 1947, pp. 232-34.

(9) Ernest Schanzer: *The Problem Plays of Shakespeare* (Routledge & Kegan Paul, London), 1965, p. 119.

(10) Walter Pater: *An Appreciation of 'Measure for Measure,'* ed. by D.J. Palmer, *op. cit.*, p. 59.

W. Pater は更に Angelo の論は casuistries (決疑法) とするが、前段の説得場面での法解釈による対応は、かならずしもこの様に断定することに疑念をもつ。

(11) V. K. Whitaker: *Shakespeare's Use of Learning, op. cit.*, p. 214.

トマス・アクイナスの *Summa Theologica* を引用し、‘the will rather than the reason is corrupted’ と指摘する。

(12) F. P. Wilson, ed. by G. K. Hunter: *The English Drama 1485—1585* (Clarendon Press, Oxford), 1969 pp. 57-8.

Perkins の *Treatise on Christian Equity and Moderation* (1604)⁽¹³⁾ によれば, Bad judge には二種類あること。即ち(1)「Mercy, mercy とそれ以外何もせず, 人に厳しく法を適用しないこと」, (2)「Law, law としか口にしない連中で, 正義は常に法を軽減せず, justice, justice と叫ぶこと」であるとしている。

Isabella. I do think that you might pardon him,
And neither heaven nor man greive at the mercy. (49-50)

Angelo. I show it most of all when I show justice; (100)

共通した面があることに気づく。

トマス・アクイナスによると, sloth は charity の一様相である joy の反対であって, laziness と同様に spiritual narrowness (心の狭さ) も sloth に含まれるとする。A. R. Velie⁽¹⁴⁾ が, この点からみても Angelo は a proud man として sloth の罪を犯していると指摘する。当時としては, Thomas Dekker のパンフレット *The Seven Deadly Sins of London* の中で sloth を lazy だけでなく 'to gather corruption' するものであり, 更にその様な人間は, 'the true slothful man that does not good' と書いていることからしても理解しうる。Isabella の贖罪論と Angelo の法理論の展開では, 二者択一を相互に求め, 固執している。それだけ内的矛盾を益々相互内に拡大し, 自己撞着におちることになる。然し, この聖と俗による倫理的, 論理的展開の中で, Angelo は次第に自から説得されていることを自覚し始める。

(Aside) She speaks, and 'tis
Such sense, that my sense breeds with it. (141-2)
Can it be
That modesty many more betray our sense
Than woman's lightness? (168-170)

Angelo の法正義とその絶体制への確信には, pragmatic の様相さえ感じら

(13) Ernest Schanzer: *The Problem Plays of Shakespeare, op. cit.*, p. 115.

(14) Alan R. Velie: *Shakespeare's Repentance Plays* (Associated University Press Inc., New Jersey), 1972, pp. 57-9.

A. R. Velie によれば, deadly sins (seven deadly sins) - pride, covetousness, lust, anger, gluttony, envy, sloth の七次罪のうち sloth は中世紀とルネッサンス期の影響から *spiritual narrowness* も含まれていると指摘する。

れる。Escalus の忠告に対して、

'Tis one thing to be tempted, Escalus,
 Another thing to fall I not deny,
 The jury, passing on the prisoner's life,
 May in the sworn twelve have a thief or two
 Guiltier than him they try. (17-21)

と言いつれたのも、彼の性格というより寧ろ、自己判断の正確と自負の強さを表現していると考えられる。'The difficulty of just judgement, of judgement that shall not be unjust'⁽¹⁵⁾ の教訓を与えている。絶体的な Angelo が二幕四場では、主客転倒し被説得者が説得者に変化する。何故か？

Isabella. Hark how I'll bribe you: good my lord, turn back.
Angelo. How! bribe me? (145-6)

今までの Angelo の Isabella に対する無意識的感覚を完全に意識化した turning point として重要な意義をもつ場面である。この言葉は、Isabella の一連的愛の論理の帰結である精神的賄賂 — これは祈りを意味する (true prayers) — の献上を、Angelo が肉欲的賄賂と理解しようとしたことにある。これは Angelo に (人間には誰れにも) この様な潜在質があったこと、即ち人間の内的に深く存在する根源的な問題を表層化したものである。Isabella の訴える mercy に対して、Angelo にとって mercy はまさに世俗的 mercy、取引的なものでしかなかった。

Thieves for their robbery have authority,
 When judges steal themselves. . . What, do I love her,
 That I desire to hear her speak again?
 And feast upon her eyes? What is't I dream on?
 O cunning enemy, that, to catch a saint,
 With saints dost bait thy hook: most dangerous
 Is that temptation that doth goad us on
 To sin, in loving virtue: never could the strumpet,
 With all her double vigour, art, and nature,
 Once stir my temper: but this virtuous maid
 Subdues me quite. (176-186)

(15) W. Pater: *An Appreciation of 'Measure for Measure'*, *op. cit.*, p. 60.

奔放な情欲は「泥棒にも三分の理あり」式的非論理性へと墮落させ、またその正当化を試みる。更に倫理観の破究へと雪だるまの様に急転していく。「悲劇の世界を荒廃させる無法であり利己的な衝動」⁽¹⁶⁾であり、正義を自負する人間のあまりにも人間的な現実的姿を大きく浮彫りする。自己の二重性への盲目を露出したことになる。Isabellaの自己矛盾は、Angeloのinner inconsistencyを表象化し転回させる役割をもつた。非論理性と論理的自己懂着一倫理的、論理的欠陥の中でのcrimeとsin—人間の情緒的發展（傾向性的思考）—情的移譲へとなり、人間の弱さが完全に露呈されてくる。Angeloが自からマイナスを招いたのも、‘There who experience a breakdown between language and meaning are living a breakdown between experience and public function’⁽¹⁷⁾の実証に外ならないと考えられよう。

B 二幕第四場

A. R. Velie⁽¹⁸⁾は、Angeloの三つの罪として、(1) the attempted seduction of Isabella (誘惑、邪淫)、(2) the attempted judicial murder of Claudio (法正義による殺人)、(3) the abuse of the powers of his office (世俗権威と自負尊大性)。キリスト教倫理への不遜で許されない態度であった。倫理的な罪を犯したことになる。また社会的に国家的秩序の権威容認といえるパウロの言葉⁽¹⁹⁾を受入れているAngeloは自から論理破壊すらしていることになる。法の守護者Angeloといえども人間(mortal)である以上、彼の内在するmatter (the root of the matter. ヨブ記19章18節)を、特に自から嫌悪したfilthy vicesをこの場面で顕現化したことになる。

(16) E. C. Pettet: *Shakespeare and the Romance Tradition* (Methuen & CO. LTD., London), 1970, p. 157.

Angeloのこの変化と行動はロマンティックに必要なものを失なわせていると指摘する。

(17) Terence Eagleton: *Shakespeare and Society*, op. cit., p. 76.

(18) A. R. Velie: *Shakespeare's Repentance Plays*, op. cit., p. 51.

(19) Let every soul be subject unto the higher powers. For there is no power but of God: the powers that be are ordained of God. Whosoever therefore resisteth the power, resisteth the ordinance of God: and they that resist shall receive to themselves damnation. For rulers are not a terror to good works, but to the evil. Wilt thou then not be afraid of the power? do that which is good, and thou shalt have praise of the same: For he is the minister of God to thee for good. Romans, 13:1-4.

Angelo. Ha! fie, these filthy vices: it were as good
To pardon him, that hath from nature stol'n
A man already made, as to remit
Their saucy sweetness, that do cōin heaven's image,
In stamps that are forbid: 'tis all as easy
Falsely to take away a life true made,
As to put mettle in restrained mints,
To make a false one.

Isabella. 'Tis set down so in heaven, but not in earth,

Angelo. Say you so? then I shall pose you quickly. . . .
Which had you rather — that the most just law
Now took your brother's life, or to redeem him
Give up your body to such sweet uncleanness
As she that he hath stained?

Isabella. Sir, believe this,
I had rather give my body than my soul.

Angelo. I talk not of your soul: our compelled sins
Stand more for number than accompt. (43-58)

Angelo には法理論とその正当性の擁護と、宗教倫理への畏怖も存在しない、ただ権力をもった人間の危険な愛欲の説得と変化する。‘Plainly conceive, I love you’ (141) で完全に破綻している。冷やかな理性 (reason) を凌駕する激情 (paraion) の持主と変貌する。

Isabella は、愛の論理に対する Angelo の人身御供的愛の要求を拒否する。

Angelo. And his offence is so, as it appears,
Accountant to the law upon that pain.

Isabella. True.

Angelo. Admit no other way to save his life —
As I subscribe not that, nor any other,
But in the loss of question — that you, his sister,
Finding yourself desired of such a person,
Whose credit with the judge, or own great place,
Could fetch your brother from the manacles
Of the all-binding law: and that there were
No earthly mean to save him, but that either

You must lay down the treasures of your body

To this supposed, or else to let him suffer... (85-98)

より人間臭い現実性をもって「肉の働き」(ガラテヤ人への手紙 5:16-24)をす
る Angelo は、前提条件を設定し三段論法をもって、Isabella に強くせまつて
くる。邪淫と殺人 — 兄を救済する為に自己を捨てるかの二者択一である。A
(兄の救済)を行えば B (邪淫)となり、C (兄の放棄)を行えば D (殺人)
となる。十誡は第七誡として「汝姦淫するなかれ」と諫しめているし、大前
提として邪淫は殺すことと同じく罪 (Fornication is as wicked as murder.) で
あると教えている。Isabella はまさに複雑破壊的ジレンマ complex destruc-
tive dilemma に落ちいる。彼女はこの様なジレンマに直面した時、何を選択
するのか。自我の認識による自己保存なのか。Isabella が主張し続けてきた贖
罪と慈悲は空虚な絵空言にすぎなかったのか。「あなたがたの中でほんとう
の者が明らかにされるためには、分派もなければなるまい」⁽²⁰⁾ということは、
Isabella の心の中での分派 — 自己の sin (Angelo を受け入れて chastity を失
うか)を認めるか、または、他の sin-crime (兄はすでに chastity を失つてい
る — 国法違反)をより重視するか — を明確にしなければならない。世俗法
に従がわせるという事によって問題を避けたのは何故であろうか。Angelo が
Isabella の humility と modesty はニセモノだと皮肉っていると E. Schanzer⁽²¹⁾
が指摘するのもまた皮肉である。倫理観によって自己矛盾を拡大した Angelo
にとっては、少なくとも有利な立場に位置したことによるからであろうが、作
者の宗教への皮肉と考えるのは早計であろう。

妹 Isabella は、二者択一に際して、自から sin を犯すことの恐れから国法
と、律法を犯した兄 Claudio の死を望む。

(20) For there must be also heresies among you, that they which are approved
may be made manifeste among you. I Corinthians, 11:19.

(21) Ernest Schanzer: *The Problem Plays of Shakespeare, op. cit.*, p. 98.

E. Schanzer は、Isabella の言葉 (75-6) の中に、'prolixious blushes' を感じる
と指摘する。自己矛盾の内的認識によるものであろうか？

Angelo. Your sense pursues not mine: either you are ignorant,
Or seem so, craftily; and that's not good.

Isabella. Let me be ignorant, and in nothing good,
But graciously to know I am no better.

Angelo. Thus wisdom wishes to appear most bright,
When it doth tax itself: as these black masques

Proclaim an enshield beauty ten times louder
Than beauty could displayed.

(II, ii, 74-81)

Isabella. As much for my poor brother, as myself...

That is; were I under the terms of death,
Th'impression of keen whips I'd wear as rubies,
And strip myself to death, as to a bed
That longings have been sick for, ere I'd yield
My body up to shame.

Angelo. Then must your brother die.

Isabella. And 'twere the cheaper way:

Better it were, a brother died at once,
Than that a sister, by redeeming him,
Should die for ever.

(99-108)

Isabella は善 free pardon と悪 ignomy を明確にすることによって、第二場における漠然とした態度を払拭したかの様にみえる。彼女の判断は量的には単称、質的には肯定、関係には定言、様式には突然となっている。従ってここに来て彼女の矛盾は一層拡大され葛藤は激しくなるのであろう。Isabella は自分自身無意識に、女性としての脆さを露呈する。

Angelo. Nay, women are frail too.

Isabella. Ay, as the glasses where they view themselves,

Which are as easy broke as they make forms:

Women! help heaven; men their creation mar

In profiting by them... Nay, call us ten times frail,

For we are soft as our complexions are,

And credulous to false prints.

(124-9)

ここには今までにはみられない程の sexual persuasion を感じとる。兄 Claudio の死が決定的となった事への罰意識の現われか、それとも女の器としての弱さの無意識の意識化なのであろうか。然し Isabella 自身比較的 inner conflict と doubt から自由であり、⁽²²⁾ 苦悶葛藤がさほど激しくないところに問題を感じる。

Then, Isabella, live chaste, and, brother, die:

More than our brother is our chastity.

(184-5)

E. Schanzer⁽²³⁾ は殉教的態度であると指摘するが俊厳なピューリタンの態

⁽²²⁾ A. P. Rossiter: *Justice on Trial, op. cit.*, p. 105.

⁽²³⁾ Ernest Schanzer: *The Problem Plays of Shakespeare, op. cit.*, p. 98.

度であったとしても、例え殉教的であったとしても、これはキリスト教倫理の誠実な実践なのであろうか。聖書の説く倫理に外的に服従したのであって内的に従ったといえるであらうか。Isabella はキリスト教的人格としての二つの思惟方法 — ルターの（良き人格であらねばならない）という「よき人間」論と、トマス・アクイナスの（人間の弱くされている自由意志を内から強く高揚する — それは祈りによる）という「注賜的思寵をもつ人間」論⁽²⁴⁾ — に表面的に近似しているといえよう。

Isabella は St. Clare に足を踏み入れたのであり、probation（試練）にあつて神と人の前にたたさされている。「私にとって神に従うことは善である（*Mihi adhaerere Deo bonum est*）」と深く認識しているのであろう Isabella は「それ故、正しい意志は正しい愛であり転倒せる意志は悪しき愛である」⁽²⁵⁾と信じている。愛は人間の内的な意志の力にほかならない、従って行為が伴なうべきといえる。社会的制裁を当然の理とうけとめている彼女に、表面的に極言すれば偽善的にうけとめているもと考えられないだろうか。完成された倫理行為の概念を完全実施することこそ、信仰を正しく守る者とする Isabella の変形した自己防衛ともうけとめられる。何んと皮肉な事であらう。兄 Claudio が ‘*Death is a fearful thing*’ (III, i, 116) と死の恐怖を妹に訴えても、‘*shamed life a hateful*’ と答える冷い響きに厳しさと同時に何か空虚さを感じさせる。然し Isabella にとっては二重の罪を犯すことには耐えられない事なのであろう。

I had

rather my brother die by the law than my son

should be unlawfully born.

(III, i, 195)

悲痛な叫びが聞こえてくる。生れながらにして、罪ある人の子への慚愧に耐えられないことを切実に告白している。

Mercy を説いた Isabella のこの非寛容の態度は、「毒麦の譬」⁽²⁶⁾の解釈を「もし妻がそれと一緒に抜きとられないことが明らかならば、毒麦を抜いて

(24) 印具徹「トマス・アクイナス」(日本基督教団出版部、東京)、1962。

(25) 茂泉昭男「アウグスティヌス倫理思想の研究」(日本基督教団出版局、東京)、1971 pp. 281-3。

(26) マタイ伝13章24—30節、36—43節。

「最後の審判のときまで善人と悪人は共存をゆるされるべき」とイエスは説いていると解釈される。

しまうべきである」⁽²⁷⁾ことに通じる。宗教的非寛容の擁護者または、少なくとも当時のこの思想的影響をうけている教派にとっては、Isabellaのこの態度もあながち否定されることはないであろうと考えられる。神（聖書の倫理）には active であつたが、従って人には passive でしかない。人間存在の価値判断の位置づけへの峻厳な呼びかけとなっていると考えられるが、表層的には皮肉な問いかけともなるうか⁽²⁸⁾。

Who would believe me? O perituous mouths,
That bear in them one and the self-same tongue,
Either of condemnation or approval: (172-4)

論理に優る倫理への思いと、悪しき判断による論理の非論性に思いをかけている。然し Isabella は論理と倫理のいずれにおいても自己矛盾の渦中に漂よったといえる。

IV おわりに

Isabella が完全な人間になりたいという願望に憑つかれた姿の中に、(1)自から *Measure for Measure* の主題対象者となっていること。(2)ピューリタンの厳正さ、倫理行為の厳しい実践者であって、ルネッサンス・ヒューマニズム的人物とはいえない諸様相。(3)誰れにでも起りうる不完全な人間の様相等がみられる。はじめの小さい誤り (Angelo の法論理を首肯し、倫理的嬌小ともいえる説得) は終りには大きな誤り (兄 Claudio の断罪是認) となっていた。肯定概念を否定概念で置換出来ないことをここでも証明していよう。二場における倫理的展開が、被説得者となった四場では論理的展開をすることによって質的相異を克服できなかったことにある。「倫理的価値は基本的には行為の対象によってきまるが、形相的 (本質的) には意図によってきまる」⁽¹⁾と考えるならば、Isabella についてはこの点においても (対象と意図において) 展開が不十分であったことになるう。従って矛盾と葛藤 (悲劇的葛藤には乏しい) の中で自己の主張の正当性に沈潜し、客観的には自己憧憬となっている。聖書の倫理に外的には服従こそしているが、内的にはその本質を

(27) H. カメン、成瀬治訳「寛容思想の系譜」前出、p. 330。異端迫害が認められたアウグスティヌス (350-430) の北アフリカのドナトゥス派の反対運動を起した時の解釈。

(28) Oscar James Campbell: *Shakespeare's Satire* (Gordian Press, New York), 1971, p. 135. 'the plot... is exactly like that of the typical satiric drama.'

(1) 和田和夫「トマス・アタイナス研究」前出、p. 24.

現実的な人間性によって認識し従っているとはいえない。

Angelo の passion は reason を超え、力の論理を背景に（法と正義の論理は

As for you,

Say what you can, my false o'erweighs your true. (169-70)

とまで墮落した)、人間の最も嫌悪すべき弱点を露呈させた。‘Sin as the result of passion may arise through either cause, blindness of understanding, or perversion of the will’⁽²⁾ と考えられるものであり、Angelo の Isabella に対する love はこの問題 (passion) と深く一致する。従って彼は間違いをおかすか (to err)、罪を犯す (to sin) かである。Isabella にとって、投げ出すことができる生命 (肉体 - body) も、

O, were it but my life,

I'd throw it down for your deliverance

As frankly as a pin.

(III, i, 104-6)

また、汚辱を許さぬ心 (魂 - soul) も、

Better it were a brother died at once,

Than that a sister, by redeeming him,

Should die for even.

(II, iv, 106-8)

全て聖霊の宮であるが故にそれを聖く守ること、その為には、神は一切の不潔な行為、動作、言葉、思念、快樂そして人をこれらに誘う一切のことを諫めている彼女に、矛盾を感じながらもある種の不変的実相をみる。トマス・アクイナスのいう *platonic virtue*⁽³⁾ を忠実に求めたため、かえって自覚しないままに大きな罪を犯したことになる。二つを行えない人間の深淵な悲劇ではないだろうか。それは、人間としての存在と、良き信仰者としての存在という二重構造的人格の存在が如何に至難であるかをも示している。人生の織りなす糸の複雑さを、この説得場面に縮少し、倫理と論理の展開の中で、生と死、正と邪、慈悲と正義、許しと非寛容を通して伝えてくる。調和の至難さを劇的創意の中で、作者の人間観を一面には E. C. Pettet が指摘する方法で、私達を educate しているのではないかとさえ疑ぐってみたくなる。

(2) L. B. Campbell: *Shakespeare's Tragic Heroes, op. cit.*, p. 99.

(3) L. B. Campbell: *ibid.*, p. 97.

(4) E. C. Pettet: *Shakespeare and The Romance Tradition op. cit.*, 'This sour spirit of disillusionment and cynicism is only one of the salient features of the 'dark' comedies.'

The Significance of Robert Lowell's *Life Studies*

Robert KUNTZ

This essay attempts to show the importance of Robert Lowell's fourth book of poetry, *Life Studies*. It compares *Life Studies* to the traditional characteristics of epic poetry and shows that, in many ways, *Life Studies* represents Lowell's epic poem. But, more importantly, it shows how Lowell uses *Life Studies* as a means of exorcising the memories of his past from his poetry.

The Seduction Theme -- Holy and Secular Interpretation through Ethical and Logical Development in *Measure for Measure*

SHOZO TAKAHASHI

Shakespeare shows us various seduction scenes and themes of seduction in such plays as *Richard III*, *Julius Caesar*, *Othello* and *Measure for Measure*. Seduction themes in seduction scenes are many: 1. relative aspect of the seducer and the seducee in ethical and logical development, 2. self-contradiction or conflict shown consciously or unconsciously, 3. turning point which develops the plot, 4. anticipation of characters concerned or of the audience, 5. psychological approach and rhetoric equivocation, etc. Here in *Measure for Measure* some surveys are taken through the ethical and logical development shown in Isabella and Angelo.